

親しく正しく和やかに

当山先々代三吉日照上人の提唱による
当山スローガンです
揮毫=大本山本興寺御開士大平日晋上人

季刊『寺楽寿』は東京都世田谷区北烏山の法華宗（本門流）
本覺山妙壽寺が発行する寺報です。
檀信徒の皆さまをはじめ、妙壽寺にご縁のある皆さまに
広くお読みいただければ幸いです。

寺楽寿

No.64

令和8年3月1日発行



本覺山 妙壽寺 〈法華宗（本門流）〉
〒157-0061 東京都世田谷区北烏山 5-15-1
電話 03-3308-1251 FAX.03-3308-7427
ホームページ <https://www.myojuji.or.jp>



初めて婦人会に参加して

秋山多恵子

（婦人会の起源）当山婦人会発足の経緯は、昭和22年、当山先々代日照上人が京都・大本山妙壽寺へ晋山（住職就任）にあたり、同本山に婦人会があることを鑑み、当山総代世話人・婦人方を中心により発足されたのが始まりです。ご興味のある方は当山寺務所まで。

総代としてお世話になっております父（村田雅一）の勧めにより、秋山家の墓を建てた縁で、令和5年1月の新年会に出席して、そして今回（令和7年12月）初めて婦人会に参加させていただきました。お寺の婦人会とは想像もつかず、日比谷松本楼でのランチと先輩の方々と初めての出会いというシチュエーションで相当緊張してお部屋に入りました。お話を伺っていくと、いろいろな世界を生き抜いていらっしゃる方ばかりでした。そんな素晴らしい経歴をお持ちなのに、気さくで素敵なユーモアのセンス、温かく優しいお心遣いと親近感を抱きました。そして、こんなに素晴らしい先輩方に少しでも近づきたいとの気持ちを持ちました。また、今まであまり意識してこなかったご縁、そしてそれを導いてくれた先祖を感じはじめていました。この出会いは先祖から紡いできた縁の賜物として、今後大切にしていきたいと思えます。このような素晴らしい機会をいただき、心より感謝申し上げます。今後ともよろしくお願いたします。（主人秋山博司氏は当山世話人）



写真手前左が秋山多恵子夫人、右が当住久美夫人



樹木ミモザ(アカシア)の下で当住上人(令和7年3月9日)

大本山本興寺 加歴第百三十五世大平日祐祝下晋山式

1月24日快晴の兵庫県尼崎大本山本興寺にて、香川県観音寺市國祐寺住職大平日祐祝下加歴第百三十五世の晋山式が奉修されました。國祐寺様と当山妙壽寺とご縁は古く、大正6年に日祐祝下の曾祖父、日済上人が大本山本興寺御貫首に晋山された際、当山先々代日照上人は「法の響」社記者として取材させていただいており、以来深いお付き合いをさせていただいておりました。その後の御祖父日譲上人・御尊父日晋上人とも、先々代から当住に至るまでご交誼いただけてきました。ご晋山の同祝下は、早稲田大学文学部修士課程を修了後、法華宗興隆学林修学、昭和46年興隆学林講師、同59年教授、平成22年学林長就任。この間昭和60年、学林は興隆学林専門学校となりました。また平成17年法華宗教学研究所有長、現在は名誉所長であります。

その研究と学識は当宗にとどまらず、仏教学・宗学の泰斗であることは、斯界の認めるところであります。当住上人もまたその門下の一人であり、親しくご指導いただいております。

晋山式は厳かに執り行われ、その後、都ホテル尼崎において祝宴が開かれました。

※加歴とは、寺院の歴代に加えるにふさわしい僧侶を推挙して、歴世に加わっていただくこと。



中央=大平日祐祝下、左=佐々木明乗上人、右=当住上人

都仏日誌 (東京都仏教連合会)

- 1/16 監査会 於 浅草龍園
- 2/11 第2回企画委員会 於 浅草長寿院
- 2/19 常務理事会・全日本仏教会仏教懇話会

法要のご案内 (別紙参照)

3月20日(金・春分の日)
春彼岸中日法要
初座:午前11時 第二座:午後2時 動物諸霊法要:正午

5月2日(土)
猿江例大祭・正隆会勉強会 (別紙参照)
猿江別院法要 11時~
猿江稲荷社春季例大祭 11時30分 昼食 12時
正隆会仏事勉強会 午後1時~

7月16日(木) 午前11時 新孟蘭盆会法要(新盆)
正午 動物諸霊法要
午後2時 孟蘭盆会法要

猿江別院御写経会

4月2日(木) 6月25日(木)
8月6日(木) 10月15日(木)
※毎回、木曜日 13時~19時 参加費:500円

新規墓所 ご案内

- 3R×4R=6基
- 3R×3R=6基
- 2R×2R=8基

詳細は当山までお問い合わせください。

正隆会

[SHORYU-kai]
午後2時開催

当山では、毎月第2土曜日午後2時より月例正隆会を開催しております。仏教や法華経についての勉強会や写経会、またウォーキング課外活動を行っています。檀信徒、ご友人どなたでも参加できます。例会では、毎回1時半より正隆廟墓前法要を奉修しております。

- 3月14日(土) 勉強会「法華経への誘い」拝読 18
- 4月11日(土) 勉強会「法華経への誘い」拝読 19
- 5月2日(土) 猿江大祭・正隆会仏事勉強会 (別紙参照)
- 6月13日(土) 勉強会「法華経への誘い」拝読 20
- 7月11日(土) 写経会
- 8月 休講

寺日記

てらにつき

- 12月14日 中央義士会義士祭 於 高輪泉岳寺
- 12月15日 真宗大谷派東京教区研修会
- 12月17日 非戦平和を願うつどい「敗戦80年を縁として追悼法要・講演」於 東京慰霊堂
- 12月18日 全日本仏教会戦後80年全戦没者追悼法要 於 芝・全日本仏教会会務所
- 12月18日 富山信行寺元宗務総長二瓶海照上人墓参
- 12月20日 第31回納骨堂建設委員会
- 12月21日 御焚き上げ法要・大掃除
- 12月24日 音楽評論家・富永壯彦氏(秀文院音日社居士)ご逝去
- 1月1日 年頭国禱会法要
- 1月10日 裏千家淡交会東京互礼会
- 1月12日 於 ホテルニューオータニ
- 1月17日 遠州流初点前 於 神楽坂・遠州流宗家
- 1月17日 総代会・年頭会祈願法要・役員婦人会
- 1月20日 総会・新年懇親会
- 1月23日 東京教区新年会 於 浅草ビューホテル
- 1月23日 東京都宗教連盟理事会・懇親会
- 1月23日 於 杉並区立正佼成会
- 1月23日 江戸千家蓮花庵前家元本葬儀
- 1月24日 於 上野寛永寺輪土殿
- 1月24日 大本山本興寺加歴第百三十五世大平日祐祝下晋山式(上記参照)
- 1月29日 全日本仏教会新年会①
- 1月31日 於 京都・都ホテル
- 1月31日 法華宗モンス・法華宗興隆学林株橋隆真教授講義 於 新宿常門寺
- 2月3日 節分会法要・豆まき② 正隆会
- 2月12日 写経会
- 猿江・猿江別院
1月1日~3日 初参り
担当:1日・2日 園田顕教師
3日 大坪顕孝師



12月8日 「ねぎまの殿様」を高座に掛ける三遊亭金朝師匠、作者・五代目立川談志の当山墓所参拝



12月7日 花崎玉女地唄舞の会



12月9日 久保木日將管長祝下御導師のもと金井内局退任式



小玄閣前の白梅、かつてここは紅梅「紅千鳥」



1月20日 屋根の落ち葉清掃(サエキツリー作業)



スズメバチの巣(サエキツリー作業で駆除)



スズメバチの巣(サエキツリー作業で駆除)



1月20日 屋根の落ち葉清掃(サエキツリー作業)

俳句事始 師走・睦月
百茶色げやき枯葉の色いかん
討ち入りの雁木行列風を切る
口遊むシャンソンの枯葉銀座街
沢山の銀杏落ち葉を子ら蹴りぬ
フレデイの話しを想ふ枯葉かな
振袖の羽子板少女今何処
見返れば我を見送る白き梅
山は無き都会暮しの寒鴉
鴉 鶴



昨年、裏千家今日庵の月刊誌『淡交』に掲載された
裏千家老分・小坂敬氏の「酒井抱一のパトロン 永岡成美」書評を
ここに転載いたします。

あらためて、ご寄稿いただきました小坂氏に御礼申し上げます。

また、下段には永岡成美追善茶会の取材記事を
仏教・神道の専門紙『中外日報』から転載いたします。

書評

『酒井抱一のパトロン 永岡成美』

裏千家老分・株式会社小松ストアー会長 小坂 敬

19世紀に深川にあった妙壽寺の檀家で豪商の鴻池屋永岡成美の美術品収集家としての活動とその商才について宮武慶之先生が時代の背景と共に見事に描いた本を淡交社が刊行した。今は千歳烏山にある妙壽寺の三吉廣明住職とはロータリークラブで一緒にいて、三吉さんからこの本の書評のご依頼を受けた。このご依頼を受けた時は今まで全く知らなかった登場人物と一度もお参りをした事がないお寺についての本の書評を書くのは無謀だと思っただけの本を読んでもう一度日本文化とそれを支えてきた人たちの事を考え現在の比較に思いをめぐらせてみた。

平安京時代においては文化を支えていたのは武家で、江戸ではそれが庶民の文化と移り変わり、成美のようなパトロンが現れて来る。その背景には平和社会の持続による心の余裕と絶えず文化を探索する江戸っ子の好奇心があるのではないかと思う。平和で心の豊かさを大事にする世界でもまれに見る文化を尊ぶ世の中が存在したのではないだろうか。

現在の社会を考えるとき、抱一のような芸術家から指導を受けながら文化を支える層が薄くなった。成美は財産もあり、そういう意味での余裕があったがそれだけではなく、文化に纏わる金銭的な価値や名誉よりも心の豊かさに価値を見いだしたのではないだろうか。終戦から80年が経過した今の国民は昔のような心の余裕が欠けているのではないかと懸念する。日々の仕事に追われ、休みには純粋な楽しみだけではない、仕事を兼ねた活動で時間を費やし、自分自身の心の豊かさを広めることがおろそかになる。

お茶を嗜む人も数が減り、花柳界で遊ぶことについて余裕をもって足を向ける事が出来る人も少なくなった。子供の時、スマホとゲームに多大な時間を費やした人は好奇心の対象が偏ってきて、大人になってもそれから抜けきれないなどと云われている。この世に生を得てから様々な刺激を基に、広い体験と経験者の知恵に接することで自分の価値観と人生観をより豊かにした人がふえて文化をより大事にする世の中になって欲しい。行政も文化を支えるが、文化に関わる人達は苦しい状況から解放されることはない。これにより国の文化は次第に力を失い衰えて行くのではないかと危惧する。

文化活動の活性度を高いレベルに維持し続けるのに一番大事なのは人間としてその文化が好きになり楽しむ事が学術的に評価するよりも効果があると思う。この本を読んで感じたことは、その時代の文化を知り好きになるには様々な刺激を体験し先ず見ることと触れることであり、そのために十分に時間を費やし、様々な知識者から教えてもらうことだ。成美も最初は宗教心からくる美術とのふれあいで始まり、それが抱一からの影響で好きになり楽しんだのではないだろうか。抱一だけの付き合い合いではここまで関心が深まることはないだろう。本の中で成美の遊びの一例として、隅田川に尾張屋彦三郎を誘って、芸者と時間を乗せて狂言を行ったとある。このような遊びをするにはそれなりの心得が必要であり、一夜漬だけでは出来ない。

文化を本当に理解するのに好きになることが大事であるが、更に美意識を磨くことも欠かせない。美意識は勉強だけでは自分のものにするのは難しい。美意識を育むのに数多くの美を体験する事が不可欠で、体験しながら知らず知らずのうちに美を感じ取る力が付いてくる。奥深い美を感じられるようになるには感性と体験の回数と時間が必要である。

成美の妙壽寺との関係で曼茶羅などの寄進があり、それらの寄進から美術に対する関心と知識を深めたと思像する。また、長男、伊三郎が玄々斎の高弟へ入門しお茶について知識を深め、玄々斎の進んだ考え方に触れたことも成美の文化についての考えを影響したと考えられる。折角先人たちがここまで日本文化を大事にしてきたのであるから、現世代もそれを引き継いでさらに内容を充実させて未来の世代に繋いでいかなければならない。日本文化にたいして海外の関心が高まっている中、日本人としても更に自国の文化を好きになり楽しむことが大事だ。宮武先生の本はこのような自覚を促す効果があると思う。

（月刊『淡交』令和7年3月6日号 淡交社刊 転載）
* 『酒井抱一のパトロン永岡成美』をご希望の方は、
当山までにご連絡ください。

寺と芸術支えた江戸商人を偲ぶ

東京都世田谷区の妙壽寺で12日、江戸の富商・永岡成美の第七十回忌追善法要が奉修された。絵師・酒井抱一のパトロンであり、同寺にも多大な寄進をした篤信者に感謝の唱題を捧げるとともに、ゆかりの道具で報恩茶会を開き遺徳を偲んだ。

永岡家は酒や米、みそなど江戸近郊の物産を扱う地廻り酒問屋で、鴻池屋を名乗った。4代目の永岡成美は、長次郎作の茶碗「一文字」（重要文化財）など茶道具を中心に多くの名品を所蔵した。

抱一の関連史料にしばしば名前が記されているが、詳しい実像は分かっていなかった。同寺では、伽藍を奉納した大檀越であることが伝わるものの、寺はかつて深川猿江（東京都江東区）にあり関東大震災で古文書は焼失した。

昨年、宮武慶之・同志社大「京都と茶文化研究センター」共同研究員が、同寺の墓所をはじめ様々な史料をもとに『酒井抱一のパトロン永岡成美』を刊行。成美と抱一の交流や法華信仰が明らかにされたのを機に追善供養を行うことにした。

法要には子孫、美術や茶道の関係者らが参列し、三吉廣明住職の導師で読経唱題したⅡ写真上。合わせて開いた茶会Ⅱ同下には、抱一の箱書きがある烏丸光広の和歌の掛け軸などゆかりの道具を用意し、江戸町人の法華信仰と文化について三吉住職が説明した。

また日蓮聖人の真筆曼茶羅も展覧。裏に成美の寄進と書かれていたことが事績研究に大きく貢献したという。宮武研究員は「茶人を調べていて、菩提寺に参ると意外な史料が出てくる。成美の優れたコレクションには、抱一の鑑識眼が入っていたことも確認でき、作品制作以外の重層的な活動も分かった。盛大に法要を営んでくださり、成美の喜ぶ声が聞こえるようだった」と話した。

（中外日報 令和7年10月24日号）

